

保護者の心の声に耳を傾けて

埼玉 特別支援学校教員

鈴木こずえ

語りつけない保護者の歩み

保護者と出会い、子育てについて話を伺うたびに、今日に至るまでにどれほどの語りつくせない経験を積み重ねてきたのだろう、と圧倒されます。どの保護者も、わが子の誕生から今日までの歩みを記すと、分厚い自伝書になることでしよう。いや、書き尽くせないほどの人生だと思えます。

あるお母さんは「障害児は誰にでも生まれてくるわけではないのよ。障害児を育てるように選ばれたのよ」と笑いながら語りくれました。子どもが小さかった頃、たくさんの病院や療育を走り回ったと言います。あるお母さんは「あの子が自閉症とわかった時は、なんで私なんだろうって思ったよね」とあっけらかんとした口調で語りくれました。義理の母親に、障害のある子を産んだのを私のせいにされた、障害のある弟のためにずっと我慢してきたとはじめて二十歳の兄

をもつ子どもを育てるなかでは、育てにくさに苦しんだり、できなさばかりに目がいったり、他の子やきょうだいと比べてしまったり、周りに迷惑をかけてしまおうと敏感になったり、保護者の心の在り方はとても揺れるものだと思います。

その一言が

そんななかでの相談窓口の方、療育の方、ママ友、教師等からかけられる言葉の数々。理解してほしい相手だからこそ、逆に傷つけてしまうことも多々あるのではないのでしょうか。わが子が一人目と比べて発達が遅いなどで、恐る恐る子

に泣かれた等、お母さん方の言葉の背景にある事実。障害児を育てるとするのは、自分の価値観を根底からひっくり返すほどの日々の積み重ねであり、お母さん方の子育ての歴史と今を思うと言葉がなくなりません。

揺れるわが子の子育て

私自身はじめて子育てするなかで、わが子に対して感情的になってしまふ、今までにない自分がいました。また他者からの視線を気にしたり、同じ歳の子と比べてたりと、子どもを見る目がぶれるのです。学校では、子どもをまるごと受けとめよう、子どもたちの気持ちに寄り添うことを大切にしようとする姿勢はぶれません。ところが、自分の子どもには冷静になれず、客観視できないのです。

親は子育てに悩み、冷静になれず、客観視できず、子どもに翻弄される、そういうものだと思うのです。なおさら障害もらうんだから、今からちゃんと……べき」といった、障害受容でとまどっている保護者への一面的なアドバイスに対し、ずっと引つかかっているお母さんもいました。

その一言がお母さんを傷つけてしまふ、ますます追いやっってしまう、という自覚を私たちはもたなければと思います。そう言っている私も、なおさら子育てで悩んでいるお母さんと話をする時に、言葉の行き違いがあったり、私の想像力の至らなさがあったりと猛省する日々です。

その年齢、経験ならではの子ども・保護者との向き合い方

教員経験が浅かったり、若かったり、子育てが未経験だったりすると、保護者にどう思われているのかと不安になることもあるでしょう。若さは一つの魅力です。経験年数を越える感性もあります。みずみずしい感性、子どもとの年齢の近さという強みがあるのです。子育てを経験していないというのは、子育てを経験していないという経験です。ぜひ今の自分に自信をもって保護者と向き合ってほしいと思います。その年齢、その教師の歩んできた人生ならではの子どもとの向き合い方、保護者との向き合い方があるにちがひありません。また、子どもと向き合っている姿を見れば、おのずと保護者はどんな教師なのかとわかります。どんなに繕っても、口だけの教師は口だけの教師。不器用でも子どもと真摯に向き合っていたら、保護者にその思いは伝わるのではないのでしょうか。



お母さんたちと立ち上げた太鼓サークル



埼玉の障害者まつりに太鼓サークルで出演